

1. 目的・目標・評価規準

本単元では、子供たちが踊ることの楽しさや喜びを味わうことを目的とする。目標として、運動を楽しく行うために自己やグループの課題を見付け、その解決のための活動を工夫するとともに、約束を守り仲間と助け合って踊ったり、互いの動きや考えを認め合ったり、場の安全に気を配ったりできる姿を引き出したい。

○運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、表したい感じを表現したり交流したりしている。

【知識・技能】

○自己やグループの課題の解決に向けて、表したい内容や踊りの特徴を捉えた練習や発表・交流の仕方を工夫するとともに、自己や仲間の考えた事を他者に伝えている。【思考・判断・表現】

○運動に積極的に取り組み、互いのよさを認め合い助け合って踊ったり場の安全に気を配ったりしている。【主体的に学習に取り組む態度】

2. 教科の本質と教材について

体育科の本質は、子供が仲間と協力したり、個人で課題解決に向けて練習したりしていくことで「分からない」が「分かる」になり、「できない」を「できる」にしていく中で、運動の楽しさを味わうことであると考えられる。

本学級の子供たちには、仲間と協力することで仲間の大切さに気付き、分からないことが分かるようになったり、できないことができるようになったりした時に得られる達成感や喜びを感じてもらいたい。

表現運動は、自己の心身を解き放して、イメージやリズムの世界に没入し、なりきって踊ることが楽しい運動である。本単元を通して、グループ内で動きを共有したり、話し合ったりと協力しながら取り組ませるようにしたい。そこで、次のような活動を設定する。

- ① タブレットでの動画撮影を通してタブレットPCで撮影した動画を見て、テーマやイメージに合った表現にしていくための動きを見付ける。
- ② 見付けた体の動きの実現に向けたアドバイスや自分の考えやイメージを共有し合うことで仲間の「できる」に貢献した喜びや楽しさ、「考えた工夫を仲間に分かってもらえた」喜びや楽しさを味わう。

3. 子供の実態（抽出児）と単元末に期待する本質を味わった子供の姿

本単元を通して、「自己の心身を解き放して、イメージやリズムの世界に没入してなりきって踊ることの楽しさ」を子供に味わわせたいと考える。このような実感や体験は、体育に限らず、日常生活の中においても自分の感情や考えを自信をもって人前で表現することにつながる体験になるからである。

A児…興味の有無によって、学習に向かう意欲や態度が大きく変わる。体育の表現運動に対しては不安と苦手意識がある。本単元では、仲間同士でアドバイスなどをし合ったり、感じたままに体を動かしてみたりする活動を通して、仲間と「協力」することの大切さや踊りを通して自己を表現することの楽しさに気付いてほしい。そのため、動きで表現する上で必要となる「できそうな動き」を段階的に見付けていき、「できて楽しい」を増やしていくことで自信につなげることができるようになりたい。

4. 本単元における教科の本質を味わうためのしかけ

(1) 表現運動に使いそうな動きをいくつか提示する

「できないだろう」と感じている子供に対して「できそうだな、やってみたい」という思いをもたせるため、表現運動に使いそうな動きを示すことで、多くの「できた」という体験を増やしていくようにする。

(2) 子供同士の学び合いの場を作る

子供たちには、一人一人の目標に応じて「できた」という経験をしてほしい。テーマに合った動きを出し合ったり、実際に見せ合ったりする「学び合い」の場を作ることで、表現運動が得意な子供は苦手な子供に「教えてあげることができた」経験、逆に教わった子供は、仲間から教えてもらったおかげで「やりたい動きができるようになった」経験、「仲間同士で工夫をしながら動きを通して表現ができるようになった」経験につなげるようにしたい。

(3) 「協力のよさ」に気付かせる

動画を撮ってもらったり、アドバイスをもらったりしたときに、仲間のありがたみを感じさせるための言葉がけをしている児童を取り上げ、全体の前で価値付ける。その中で、子供たちが協働して学ぶことの良さを実感してもらいたい。

(4) 教具の工夫をする

表現運動に対して、苦手意識や恥ずかしさを感じている子供でも「やってみたいな」と感じさせたり、イメージの具現化の幅を広げる教具の工夫を行う。

5. 学習の流れ（全6時間）

(1) テーマに合わせて体を使って表現しよう（1・2時間目）【態】【知】

何かになりきったり（新聞紙・ぞうきんなど）、エアスポーツを行ったりすることで、表現運動に慣れ親しむ。また、本単元の目標が「グループで考えた表現運動を発表し合おう」であることを知り、学習の進め方を知る。

- ・体をねじると、しぼった時のぞうきんを表現できたよ。
- ・普段は目に見えないものも動きで表現してみたいな。

(2) テーマを決めて表現運動を考えてみよう（3～6時間目）【態】【思】※本時は5時間目

前時で行った表現運動を生かして、次はグループごとに自分たちでテーマを決めて表現運動を行う。その際に必要であれば表現に生かせそうな物（新聞紙、傘、ペットボトル、イスなど）をグループで選び、テーマを考え体を動かしてみる。

- ・一人よりもグループでやった方ができる事が増えたよ。
- ・友達が自分では考えられなかった動きをされていて面白いよ。
- ・新聞紙をひらひらさせるだけで風が吹いているのを表現できたよ。

(3) みんなの前で表現運動を発表してみよう（7・8時間目）【態】【思】

練習してきた動きをみんなの前で発表する。その際、「見て欲しいポイント」や「1つ1つの動きの意味」などをグループで整理し、表現運動の見せ方について最終確認する。友達の前で発表し、自分たちの頑張りや工夫を見てもらうことで、自信をもち、心身を解き放して体を使って表現することの楽しさや心地よさを味わう。

- ・（他のグループの発表を見て）自分のグループとは、全然違う雰囲気で行ってみたいと思った。
- ・最初は恥ずかしいと思っていたけどやってみると楽しかった！

6. 本時の目標

自己やグループの課題の解決に向けて、表したい内容や表現運動の特徴を捉えた練習の仕方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができる。【思考・判断・表現】

本時における目指す子供像

仲間と協働しながら、自身の課題解決のための練習の仕方を選択し、自身の気づきを仲間に伝える姿。

引き出したい子供の言葉

今回の学習を通して、自分には体を大きく見せるための動きに課題があることが分かった。

〇〇さんは、かっこよくピタッと止める動きが得意なので、次の時間は〇〇さんに動きのコツを聞いて練習していきたいと思った。

7. リフレクション

7. 1. 生徒エージェンシーと体育授業

本実践を通して、生徒エージェンシーの発揮を可能にしていくための3つの要素のうち、①子供たち一人一人が自分の情熱を燃やし、別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになることを軸として単元を構想した。体育の授業の中で、子供たち一人一人が自分の情熱を燃やすことが出来るようにするために、「やってみよう」「できて楽しい」という経験をすることや「動きを考えると」や「仲間にアドバイスをするとき」、「練習中に仲間の意見をまとめるとき」などといった「自分はどのような場面で情熱を燃やせるのか」を知る必要があると考えた。そのため、「できそうだな、やってみよう」という思いをもたせるため、表現運動に使えるような動きをいくつか提示したり、表現運動が得意な子供は苦手な子供に「教えてあげることができた」経験がもてるように学び合いの場を設定した。

7. 2. 本単元での学びと抽出児の様子

子供たちが表現運動の楽しさに気付くために必要な知識や経験を次のように設定した。

- 1 リズムののり方
- 2 ものや誰かになりきる
- 3 テーマに沿って体を動かす

・リズムのとり方

単元の初めにまず、表現運動に親しんでもらうために決まったリズムに合わせて踊る遊びを行った。内容は、8844カウントに合わせて体を動かしてみるという活動で、苦手意識をもたせないために簡単な二つの動きだけでできるようにした。(例：上で手拍子8カウント→下で手拍子8カウント→上で手拍子4カウント→下で手拍子4カウント)

真似をする活動では、見様見真似で楽しんで取り組んでいた。しかし、グループに分かれて動きを考える活動になると、「(体を動かしながら)これやろう」「(友達の動きをみて)めっちゃいいやん」と楽しそうに話しながら取り組むグループもあれば、会話が上手く進まず固まっているグループもあった。どのグループに対しても些細な動きや、アイデアが出てくると「それいいね。やってみよう。」など声かけをすると2つの動きをどうするかの話し合いはスムーズになってきた。しかし、グループとしての話し合いはできていたが、一人一人全員が積極的に参加していたとは言えない様子だったので、子どもたち一人一人が自然と体を動かしたり話し合ったりできる環境を作る工夫が必要であると考えた。

【抽出児の様子】

恥ずかしさもあり、友達を前にしての発表になると動きが小さくなったり、動けていなかったりした。しかし、振り返りには、「次はしっかり動いて楽しくやりたい」「はずかしがって、小さくしか動けなかったから、次ははずかしさをふっとばして思いきりおどりたいです。他にももっとちがうふりつけでやってみよう」と表現運動に対して前向きな考えをもっていた。

・ものや動物、何かをしている人になりきる

次に、表現運動の動きのイメージを広げるために実際に新聞紙を使って遊んだり、新聞紙になりきって動いてみるという活動を取り入れた。

新聞紙を投げて遊んだりする際は、新聞紙がどんな動きをしているのか気付かせるよう声掛けをしながら行った。新聞紙になりきって動いてみるという活動では、直感で自然と体を動かしている様子や、どう動いたら新聞紙の動きを表現できるのかを首をかしげながら考えている子供の様子も見られた。子供たちは、「新聞をねじるところをどのようにしたらいいかがむずかしかったけれど友だちの動きを見たらできました。新聞紙の他にボールなどの日常にあるものになりきってみたい。」「丸まったままジャンプするのがむずかしかった。」「やっているときははずかしかった」と本時について振り返っていた。

【抽出児の様子】

新聞紙で遊ぶ活動の際は、興味を持って、楽しそうに笑顔で取り組んでいる様子だった。しかし、新聞紙になりきる活

動になると、前時と同様、恥ずかしそうにして動きが小さかったり、動けていなかったりした。グループに分かれて行った際も、なかなか動けていなかった子もいました。恥ずかしさを忘れて取り組める活動が必要であるとする。

・テーマに沿って体を動かす

前時までの子供たちの実態を見て、「(表現運動を) しなければいけない・させられている」という意識があるのではないかと考えた。そうではなく、「やってみたい」という意識に変えていくために必要なことは、子供たちに「相手に分かって欲しい・伝えたい」という思いをもってもらうことだと考え、ジェスチャーゲームを取り入れた。はじめ、ゲームの内容を理解するために、授業者が前に立って見本を見せた。相手に答えを当ててもらおうと積極的に取り組む子が前時に比べてかなり増えた。しかし、ゲームに夢中になりすぎてリズムにのることを忘れてしまっている子も多くいたので、音楽を聴いてリズムに合わせて動くよう声掛けをしたり手拍子を行うと、膝でリズムを取りながら「美容師さん」になりきって髪を切るジェスチャーや、「ウサギ」になりきって音に合わせてながらピョンピョン飛び跳ねる動きをしている子もいた。

【抽出児の様子】

前時までは、恥ずかしさがあり、あまり積極的に体を動かす姿が見られなかったが、ゲームにすることによって相手に伝えなければいけないという意識が生まれ、仲間と笑顔で楽しそうにテーマに沿った動きをする姿が見られた。

・発表に向けて

1分半から2分までの曲に合わせて、みんなの前で発表した。動きを考える際は、曲を聞いたときのイメージとそれに合う動きを付箋に書き、ワークシートに貼りながらグループで考えた(図2)。

「大きな鳥」「メリーゴーランド」「追いかけて逃げていく人」など曲のイメージから自由に表現していた。「こっちの動きの方が雨の感じがでていいんじゃない」など子供同士でコミュニケーションをとりながら取り組んでいた。

練習時間は3時間設定した。最初の1時間目は曲に合わせて動きを考えることに慣れていない子も多く、動きについて発言をする姿が特定の子に限られていた。そこで今までのリズムののり方やジェスチャーゲームを思い出させるよう声掛けをしたり、練習中に1つは自分が考えた動きをグループで紹介するという課題を与えた。そうすると、納得したように動きを考える話し合いで積極的に発言をするようになった。本番が近づくにつれ、グループ内での結束力も深まっていき、ここは特に見てほしいという「見所ポイント」を相談しながら決めていく様子も見られた。

【抽出児の様子】

練習中に動きについての発言をする姿は特に見られなかった。しかし、決まった動きを音楽に合わせて何度も練習したり、動画で動きを確認したりする際は、自ら進んでタブレットで動画を撮ろうとする姿が見られた。発表本番では、恥ずかしさもあがりながらも最終笑顔で踊りきっていた。

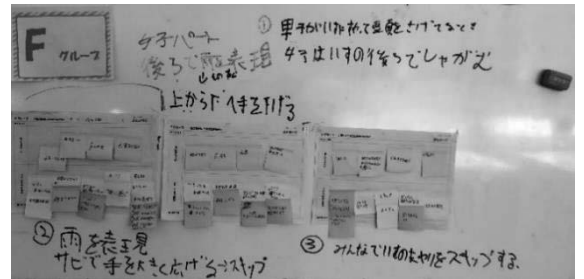


図2 動きの確認や共有に使ったホワイトボード

7. 3. まとめ

本単元では、子供たちが表現運動の楽しさに気付けるよう「できそう、やってみたい」という動きをいくつか提示したり、表現運動が得意な子供は苦手な子供に「教えてあげることができた」経験ができるように学び合いの場を設定したことで、子供たち一人一人が自分の情熱を燃やしながら自らの課題を見つけ、互いのよさを認め合い助け合いながら活動することができた。表現運動に対して、初めはクラスの過半数が苦手意識をもっていて、実際に体を動かす活動の際は、表したい感じを表現するのに難しさを感じ、小さい動きになったり、動かなかったりする子も多かった。しかし、授業を進めていく内に恥ずかしさを忘れ、「グループでいい発表をできるようにしよう」という思いも生まれ、体を大きく動かして積極的に表現している子供たちの姿が見られた。しかし、最後までイメージやリズムに没入しきれずなかなか体が動かずにいた子供の様子があったのが課題であるとする。

今後も課題解決に向けて子供たち一人一人が情熱を燃やせるよう、「やってみたい」と思わせるしかけや、情熱を燃やせるような場の設定を工夫していきたいと考える。また、3. 子供の実態(抽出児)と単元末に期待する本質を味わった子供の姿で示したように、体育に限らず日常生活の中においても自分の感情や考えを人前で表現することができるよう今回の経験を自信につなげていってほしいと考えている。